

教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る

— 各校における教育実地研究の現状調査をもとに —

代表者氏名：松津英恵（附属竹早中学校）

共同研究者：臼倉美里・粕谷恭子・高山芳樹・馬場哲生（大学英語教育分野）、中村 香（附属小金井小学校）、石毛隆史・久保幸恵（附属大泉小学校）、厚谷秀宏（附属竹早小学校）、淡路佳昌・市林竜・小菅敦子（附属世田谷中学校）、青柳有季・大里信子・末岡敏明（附属小金井中学校）、金枝岳晴・芝田千香子（附属竹早中学校）、石崎智子・久野あゆ美・菅野 晃・瀬戸口亜希・高崎朋彦・外山 徹・根本賢一・林 正太・保戸塚由紀子（附属高等学校）、秋森久美子・後藤葵・上木多加志・小松万姫・手塚史子・徳 初美・藤野智子・星野あゆみ・前田健士（附属国際中等教育学校）、渡邊 聡・木村有里・西尾真弓（附属特別支援学校）、青木ひかり（埼玉県所沢市立中央中学校）

目 次

1. 背景	44
2. 研究の手順	44
2. 1 先行研究	44
2. 2 資料の検討	45
2. 2. 1 英語運用能力の測定について	45
2. 2. 2 英語指導力の測定について	45
2. 3 データの収集と活用	45
3. 結果	46
3. 1 附属中学校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）	46
3. 2 国際中等教育学校	46
3. 3 附属高校	46
4. 考察	48
4. 1 附属中学校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）	48
4. 2 国際中等教育学校	48
4. 3 附属高校	49
5. 結論	49

教育実地研究生の英語運用能力と英語指導力との関係を探る

— 各校における教育実地研究の現状調査をもとに —

代表者氏名：松津英恵（附属竹早中学校）

共同研究者：臼倉美里・粕谷恭子・高山芳樹・馬場哲生（大学英語教育分野）、中村 香（附属小金井小学校）、石毛隆史・久保幸恵（附属大泉小学校）、厚谷秀宏（附属竹早小学校）、淡路佳昌・市林竜・小菅敦子（附属世田谷中学校）、青柳有季・大里信子・末岡敏明（附属小金井中学校）、金枝岳晴・芝田千香子（附属竹早中学校）、石崎智子・久野あゆ美・菅野 晃・瀬戸口重希・高崎朋彦・外山 徹・根本賢一・林 正太・保戸塚由紀子（附属高等学校）、秋森久美子・後藤葵・上木多加志・小松万姫・手塚史子・徳 初美・藤野智子・星野あゆみ・前田健士（附属国際中等教育学校）、渡邊 聡・木村有里・西尾真弓（附属特別支援学校）、青木ひかり（埼玉県所沢市立中央中学校）

1. 背景

教員養成を行うための教育実地研究（以下、教育実習）の指導において、附属学校は重要な使命を担っている。本学附属学校英語科では、9月から10月にかけて、中学高校課程志望の大学3年生の実習生、小学校課程志望の大学4年生の実習生をそれぞれ受け入れている。中学高校過程志望の学生はほとんどが英語教育を専攻している。その一方で、小学校課程志望の学生は、数年前については、小学校課程の英語教育専攻ができたが、それ以前は英語教育以外の専攻者であったため、中学、高校で教科指導をするにあたり、英語や英語教育についての専門性が課題となる実習生も少なくなかった。そのような中で、「教師による英語の発話に誤りが多い。」「指導案作成の段階で、担当の教諭が丁寧に指導しても、改善されない。」など、一部の学生の指導力不足や英語教師としての専門性の不足が指摘されることがしばしばあり、その多くは小学校課程（英語教育以外の専攻者）の実習生であった。そしてその原因として、学生本人の英語運用能力の問題、英語そのものについて専門知識の不足の問題、教員としての資質の問題など、様々な要因が予測された。

そこで実習生を受け入れる附属学校の教員と、教育実習の事前事後に渡り学生の指導を行う大学の教員との間で、情報交換を重ね、最近数年の実習生たちの英語指導力（教育実習期間中の様子や成績）と、英語運用能力を調査し、研究をすすめることにした。

2. 研究の手順

2. 1 先行研究

これまでに英語科の教育実習生の英語運用能力、および英語指導力（英語教授力）について研究した先行研究は以下の通りである。

(1) 神保尚武 2006

英語教育実習の実態、中・高の教育現場が求める英語科実習生像、教育実習期間長期化の課題を明らかにするために、教育実習生の受け入れ校を対象に調査を実施し、結果を「英語科教育実習の実態と今後の教職課程の課題」としてまとめた。

(2) 山崎朝子 2006

(1) 神保2006の研究をもとに、大学での教員養成課程の実態調査、また教育実習生の実習校を対象とした実習についての意識調査、都道府県や政令指定都市の教育委員会を対象とした「採用にふさわしい英語科教員像」に

についてのアンケートによる調査を行い、アジア諸国の教員養成事情と比較しながら、日本の教員養成制度の問題について言及している。

上記の 2 つの先行研究を踏まえ、本研究では実習生の英語運用能力と英語指導力について、直接的な形で調査を進めることにした。

2. 2 資料の検討

まず実習生の英語運用能力と英語指導力を測るにあたり、それぞれどのような資料を用いるかについて、検討を行った。

2. 2. 1 英語運用能力の測定について

英検、TOEIC など、社会一般で英語力の指標や資格として用いられるさまざまな検定試験があるが、本研究では、本学の B 類英語科の授業で最近数年の間、継続して活用していた VELC Test を用いることにした。

VELC Test を採用することとした理由は以下のとおりである。

今回の研究で実習生に受検させるにあたり、大学の英語科教育法の授業や実習期間中の放課後の時間を利用して実施することを考え、VELC Test を使用すれば70分で実施できるため、実習生にとっても負担は少ない。

実習期間中の授業ではスピーキング力、また指導案作成で Teacher Talk を書く際のライティング力も当然必要とされ、本来はそれらも実習で必要とされる英語運用能力ではある。本研究で英語運用能力の指標とした VELC Test は、リスニングとリーディングの 2 つのパートで構成され、それぞれのパートでの得点と、全体の得点と報告されるため、スピーキング、ライティングに関する運用能力は示されないことになる。しかし従来から使用されているその他の検定試験等では、内容が大学生にそぐわないなどの問題も多い。VELC Test では、4 技能のうち、受容に関わる 2 技能を対象とし、それぞれの技能で把握できる語彙サイズやまとまった長さの英語の情報を理解できる力など、日本人大学生にとって特に大事と考えられる 2 つの技能に関する下位技能を測定する内容となっている。その他、VELC Test はこれまで本学の英語科教育法の授業で活用され、難易度等についても、日本の大学生の実態に合わせて開発されたテストであり、信頼性係数も非常に高いことなども含めて検討した結果、VELC Test での総合得点を、実習生の英語運用能力を表す資料として採用することとした。

2. 2. 2 英語指導力の測定について

実習生の英語指導力を測定するにあたり、各附属学校で共通した資料として残されているものが、東京学芸大学の教育実習で、実習校から大学への報告書として提出している「東京学芸大学教育実習成績報告書（資料 5）」（以下、成績報告書）である。本研究ではそれを英語指導力の指標として活用することとした。

この成績報告書に記載する主な事項は、以下の通りである。

- ・ 5 つの評価項目（学習指導に関する3項目、生活指導・生徒理解に関する1項目、勤務態度に関する1項目）を 5 段階（1～5）で評価する評定
- ・ 原則としてその 5 項目の評定の合計から割り出される、5 段階（A～E）で表される総合評価
- ・ 成績報告書記載者による記述の所見（教科指導、生活指導を含む総合的な内容）

上記の 3 種類のデータのうち、英語指導力に直接関わってくる項目は「5 つの評価項目」のうちの学習指導に関する 3 項目であると判断し、3 項目の評定の合計点を各実習生の英語指導力を表す数値とした。また 5 段階で表される総合評価は各段階の幅が均等ではないため、今回の分析には不向きであると考えた。

2. 3 データの収集と活用

本研究において、分析の対象とする実習生は、2011年度、2012年度、2013年度の 3 カ年の附属中学・高校での実習生としている。そのうち、今年度の研究で分析の対象となる実習生は2011年度と2012年度の実習生であ

り、2013年度の実習生について今年度はデータの収集（VELC Test の得点、成績報告書）と保存のみとした。また今年度の小学校課程志望の学生については、各実習校で VELC Test を実施することになったため、VELC Test の結果が教育実習の成績報告書の記載内容に影響しないよう、VELC Test の結果の開示も11月以降とした。

なお、2012年度までの実習生については、成績報告書と VELC Test の 2 つの資料がそろっている実習生は B 類の実習生のみである。したがって、小学校課程志望で英語教育以外の専攻者のうち、前述の指導力不足と思われる実習生は分析の対象にはなっていない。

2. 3. 1 分析シートの作成

データとして得られた、英語指導力と英語運用能力の関係を見るために、ワークシートを作成し、5 月頃から検討に入った。VELC Test の得点と成績報告書の教科に関する3項目（教材研究、指導計画の立案、学習指導と評価）の評定の合計での相関を見るための散布図が作成できるように設定し、各学校ごとに処理をしたところ、緩やかな傾向が見られた学校と、結果がばらつく学校とに分かれた。そのため、英語指導力を支える要因として、英語運用能力以外のもも考えられることを想定し、生活指導・生徒理解、勤務態度の評定も、分析の参考とするために記入する欄を設けた。また英語運用能力についても、今回の研究で用いた VELC Test の総合得点だけでなく、より汎用性の高い TOEIC の相当点を記載するレイアウトにした。そのようなプロセスを経て、最終的な形（資料 6）にできあがった。

3. 結果

英語指導力と英語運用能力の関係について、3 校種（中学校、中高一貫校、高校）に分けて相関分析を行った。VELC Test の得点と実習の評価をもとに、分析し、結果は以下のとおりである。

なお、附属高校、国際中等教育学校については、附属中学校 3 校と同じ統計処理を行っているが、実習生の人数が少ないため、相関分析の結果は相関係数のみ、VELC Test の得点については全体の結果と度数分布表のみをそれぞれ提示した。

3. 1 附属中学校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）

（資料 1）は2011年度、2012年度の附属中学校 3 校での実習生の VELC Test の得点とその TOEIC 相当点、実習中の英語指導力についての評価を表したものである。この表の VELC Test の得点と評価合計の数値で、相関分析を行った結果が、（資料 2）の散布図のとおりである。

相関分析の結果、VELC テストの成績によって示された教育実習生の英語運用能力と指導教員による彼らの指導力評価の間には統計的に有意な中程度の相関（ $r=.56, p<.01$ ）があることが確認された。よって英語力のある教育実習生は指導力についてもある程度の力があることが期待でき、英語力のない教育実習生については指導力についてもあまり期待ができないと言えそうである。

3. 2 国際中等教育学校

VELC Test の得点と実習での評定の合計との相関分析について、国際中等学校での実習生から得られたデータに関しては、相関関係がほとんどない（ $r=.16, p<.01$ ）という結果であった。

3. 3 附属高校

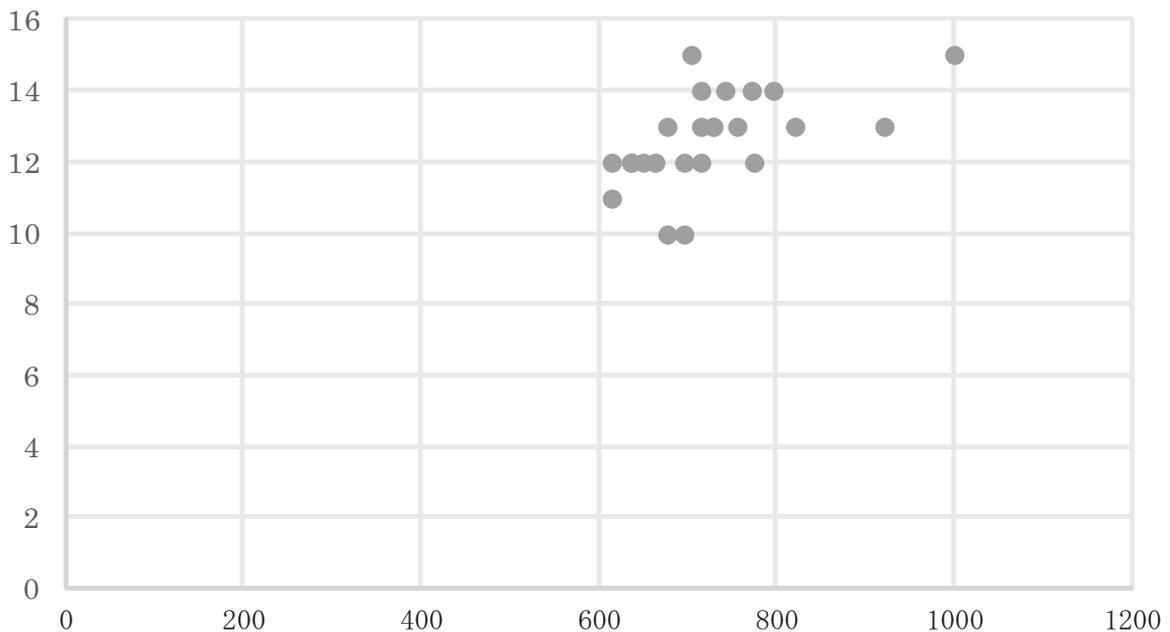
附属高校の 4 人の実習生の VELC Test の得点と実習での評価の相関分析は（ $r=-.991, p<.01$ ）という結果が出た。得られた数値を見る限りでは、負の相関関係となった。この点について、後の考察で言及したい。

資料1 附属中3校における実習生のVELC Testの得点と成績報告書の3項目の評定

実習生ID	VELC TEST	TOEIC 相当点	教材研究	指導計画の立案	学習指導と評価	評価合計
実習生1	1000	1025	5	5	5	15
実習生2	920	945	5	4	4	13
実習生3	821	860	4	4	5	13
実習生4	795	855	5	4	5	14
実習生5	774	855	4	4	4	12
実習生6	772	885	5	4	5	14
実習生7	755	795	4	4	5	13
実習生8	741	775	5	5	4	14
実習生9	727	750	5	4	4	13
実習生10	727	770	4	5	4	13
実習生11	715	820	4	5	5	14
実習生12	715	795	5	4	4	13
実習生13	715	745	4	4	4	12
実習生14	705	735	5	5	5	15
実習生15	695	770	4	4	4	12
実習生16	695	750	4	3	3	10
実習生17	678	685	5	4	4	13
実習生18	677	725	3	3	4	10
実習生19	662	705	4	4	4	12
実習生20	649	685	4	4	4	12
実習生21	635	645	4	4	4	12
実習生22	635	665	4	4	4	12
実習生23	613	585	4	4	4	12
実習生24	613	620	4	3	4	11

資料2 附属中3校における実習生のVELC Testの得点と成績報告書の3項目の評定の散布図

実習生の英語力と指導力評価との相関



相関係数 0.5554 (1%水準で有意)

横軸：英語力 (VELC テストの得点) 縦軸：指導力評価 (指導教員による評価合計)

資料3 附属国際中等教育学校

受験者数	8人
平均点	748.875点
最高点	858点
最低点	678点
相関係数	0.1604 (1%水準)

得点の分布

得点	人数
850～900	1
800～849	1
750～599	2
700～749	0
650～699	4

資料4 附属高校

受験者数	4人
平均点	822.25点
最高点	1000点
最低点	741点
相関係数	-0.991

得点の分布

得点	人数
950～1000	1
900～949	0
850～899	0
800～849	0
750～799	2
700～749	1

4. 考察

各校で得られたデータをもとに実習生当時の様子なども含めて報告した結果、校種に限らず、学生本人の人柄や学習態度が大きく影響していると考えられることが多かった。例えば「生徒と話しをすることは好きだが、指定された日時までに指導案の作成をしない。」「指導教諭の助言を聞くが、自分の世界が強すぎて、受け入れず、指導案には反映されない。教員・生徒ともコミュニケーションがとれていない。」中には「指導案作成段階で、理屈が先行し、本人のこだわりもあるため、完成させるまでに時間がかかる。研究授業の指導案ですら、修正しきれずに授業実施に至ってしまう。」などの学生も見られ、そのような学生に限って「卒論の指導でも自分の世界があり、多くを語るが、自分で準備して計画を立てるところになると、人から指示されないと研究を進められないことが多い」という大学教員からの指摘もあった。

以下は3で述べた結果について、校種別に検討し次のように考えた。

4. 1 附属中学校（附属小金井中学校、附属世田谷中学校、附属竹早中学校）

相関が見られる原因として、英語運用能力が弱い学生は、指導案作成の段階から準備に時間もかかり、実際に授業を進める際も、指導案に書かれていることをこなすだけで精一杯の状態であり、余裕がない。そのため、英語運用能力の高い学生と比べ、悪循環になることが多く、結果的に英語指導力の評価も低かったと考えられる。

英語指導力を保証するためのVELC Testの総合得点の下限が、630～635ではないかというおおよその見当がつけられた。635点という得点は、英語教員としては決して高い得点ではないが、教材研究や指導案作成などの準備を入念に行い、生徒たちにしっかり対応すれば、それよりもやや英語運用能力の高い学生にも劣らない英語指導力を発揮することができる。しかし、630を割り込むとTeacher Talkや指導案で用いられる英語に誤りも目立つようになるなど、英語指導力に問題が出てくると考えられる。

4. 2 国際中等教育学校

ばらつきが見られた原因として、一部に英語運用能力は比較的高いにもかかわらず、英語指導力があまり振る

わなかった実習生がいたことが挙げられる。指導教諭からは「教員と、また生徒ともコミュニケーションがとれていない。」ということが、指摘された。当該の実習生のデータを除いた母集団で相関分析を行うと、ある程度の相関がある ($r=0.48, p<0.01$) ことになり、生徒理解などの生徒への対応がある程度できていれば、英語運用能力が高い実習生ほど、より高い英語指導力を期待できると考えられる。

4. 3 附属高校

3で述べた相関分析の結果で負の相関が見られたことについて次のようなことが考えられる。

附属高校の4人の実習生のうち、VELC Testの得点の最低点が741点であったが、この実習生の得点をTOEIC相当点に換算すると、760点であり、決して低い英語運用能力ではない。この4人は、英語運用能力の点では比較的高いと言える。他にVELC Testの得点が700点台後半であった実習生が2人おり、この3人は実習中の英語指導力に関する評定の合計は同じ点数であった。一方で最高点を出した実習生が、実習中の英語指導力についての3項目では、他の実習生に比べ、低い評定を受けていた。このことが英語運用能力と英語指導力の相関分析で、負の相関と要因であると考えられる。

5. 結論

本研究の成果として、英語科の教育実習で当初問題となっていた実習生について、英語指導力を保証するためには、やはりある程度までの英語運用能力が必要であることが見えてきた。しかし、ある一定の英語力を超えると生徒への対応や指導教諭の助言を受け入れてどう改善していくかなど、コミュニケーション力や人柄に支えられる部分も大きいことも見えてきた。

今後の課題として、中学と高校とでは、教材の内容や量なども異なり、それぞれの校種で英語運用能力以外の要因でどこまで英語指導力を支えることができるのかということについてもさらに細かく検証する必要がある。今回の研究で、英語指導力を支えるために必要な英語力についても検討をしたが、文部科学省より英語科教員に求められる英語力として、英検準1級、TOEFL (PBT) 550点、TOEIC730点程度以上としている。今後はこの得点についても、検証をしていきたい。

また小学校での実習生について、教育実習期間中に、外国語活動をほとんど担当できないことも多いため、今回の研究では小学校の実習生は分析の対象とはしなかったが、小学校における英語指導力を支える要因等についても、研究を進めていく必要がある。

参考文献

- 研究代表者 神保尚武『平成17年度文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)(1) 英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究』JACET 教育問題研究会 平成18年 (2006年) 3月
- 山崎朝子『調査報告 2-2 英語科教職課程の現状と課題』武蔵工業大学 (現東京都市大学) 環境情報学部紀要 (2006年 2月発行)
- 外国語能力の向上に関する検討会『国際語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 ～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～』平成23年 6月30日
- 静 哲人 望月正道『熟達度診断のためのVELC Test ～信頼性と妥当性を検証する～』2013年 1月

東京学芸大学教育実習成績報告書

様式07-1

実習校種/教科	配当学級	教育実習生所属 (学生番号)	教育実習生氏名
	年 組	類 種 専修 () 専攻 ()	

※太枠内のみを教育実習生が記入して指導教諭に提出

実 習 期 間	出席すべき日数	出席日数	欠席日数(理由)	遅刻・早退
平成 年 月 日と	日	日	病欠 日()	遅刻 回
平成 年 月 日から			事欠 日()	早退 回
平成 年 月 日まで			その他 日()	

評価項目	主な観点例 (優れたものに○、劣るものに△、評価しなかったものには/)	所見 (評定が5または1の場合に記入)
I 教材研究	()教科書等の分析・活用 ()学習指導要領および学校指導計画等の検討 ()興味・関心に応じた教材の開発・工夫 ()單元設定理由の明確化 ()教科内容に関する専門性 () ()	
評定 5 4 3 2 1		
II 指導計画の立案	()本時の目標と評価の明確化 ()目標に応じた学習指導過程の構築 ()発問・助言等と反応予想の明確化 ()資料・教具・機器等の準備、板書計画等の立案 () ()	
評定 5 4 3 2 1		
III 学習指導と評価	()音声・言語・文字等の明確さ、正確さ ()受容的、応答的な姿勢 ()児童・生徒の反応への適切な対応 ()資料・教具・機器等の活用、効果的な板書 ()授業中および授業後の適切な評価活動 () ()	
評定 5 4 3 2 1		
IV 生活指導と児童・生徒理解	()生活場面での児童・生徒との関わり ()学級指導および教室環境への配慮 ()親族に基づく個と集団の課題把握 ()道徳・特別活動への参加 () ()	
評定 5 4 3 2 1		
V 勤務態度と実習への意欲	()出勤の状況(無断欠勤、遅刻等) ()指導案・日誌等提出物の提出状況 ()協同的な姿勢・コミュニケーション力 ()人権等への配慮と規範意識 () ()	
評定 5 4 3 2 1		
合計()点	評価の基準→A : 25-21, B : 20-15, C : 14-12, D : 11-10, F : 9-5 (Fは不合格)	
総合評価・所見	A・B・C・D・F (Fは不合格)	報告書作成日：平成 年 月 日

学校名	指導教諭氏名(学級)	印
校長名	指導教諭氏名(教科)	印

実習生 VILLO Test・英語指導力 分析シート

所属	学籍番号	学生氏名	実習年月	WJL TEST	TOEIC 得点	教材研究	指導計画の立案	中間指導の回数	評価合計	実習期間中の指導回数	コメント (実習中の取り組みや様子等に際する指導者へのコメント)
1	A組英語	学籍 太郎	平成28年9月	85.0		4	4	5	13		
2	A組英語	学籍 花子	平成28年9月	75.5		4	4	4	12		
3	B組日本語	学籍 太郎	平成28年10月	65.0		5	5	3	13		
4		学籍 花子	平成28年10月	80.0		4	4	4	13		
5		学籍 藤子	平成28年9月	70.0		5	4	4	13		
6		学籍 藤子	平成28年9月	75.5		4	5	3	12		
7											
8											
9											
10											
11				80.0		5	5	3	13		
12				80.0		4	5	4	14		
13				70.0		4	5	4	14		
14				80.0		5	5	4	15		
15				74.5		4	5	4	13		
16											
17											
18											
19											
20											
21									0		
22									0		
23									0		
24									0		
25									0		
26									0		
27									0		
28									0		
29									0		
30									0		
31									0		
32									0		
33									0		
34									0		
35									0		
36									0		
37									0		
38									0		
39									0		
40									0		